東方遊紙符伝

tosiki6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方遊紙符伝

【Ｎコード】

Ｎ４９３６Ｚ

【作者名】

ｔｏｓｉｋｉ６

【あらすじ】

１人の少年が幻想郷の住人と遊戯王でデュエルするとかしないとか（笑）

序章（前書き）

とりあえず主人公（ｔｏｓｉｋｉ６）
がこれから使うデッキの情報はこちら
ｈｔｔｐ：／／ｘ２３．ｐｅｐｓ．ｊｐ／ｔｏｓｉｋｉ６２４８／ｓｂｂｓ／ｃ｜ｉｎｄｅｘ．ｐｈｐ？ｇｕｉｄ＝ｏｎ&ａｍｐ；ｃｕｓ＝ｌｗａｍｃｅ&ａｍｐ；ｃｎ＝２６&ａｍｐ；ｔｎｕｍ＝２

序章

うっ・・・・・
目覚めたらそこは、古臭くボロくて、周りが物だらけで狭い小屋にいた。
ｔ「ここは・・・・・」
とにかく自分が今何処にいるのかが理解出来なかった。とりあえず、起きあがろうと思ったが、左腕が妙に重い。
ｔ「これは・・・・・。デュエルディスク！？」
左腕を見るとデュエルディスクが装着されていた
ｔ「何故にデュエルディスクが・・・・・」
その時だった、誰かが小屋にやってきた。
霖「ただいま～」
やってきた人物の顔を見ると、誰なのかすぐに分かり、そしてここが何処なのかがすぐに分かった。
霖「おや、目覚めたかい？」
ｔ「ああ、はい？」
霖「そんなに慌てなくていいよ。僕は霖之助、宜しく」
ｔ「僕の名前はｔｏｓｉｋｉ６です」
霖「へぇ～。早速だけど君に頼みたい事があるんだ」
ｔ「？」
霖「実は今この幻想郷では、デュエル大会が行われているんだ。そのデュエル大会に参加してほしい」
ｔ「はい。是非参加させて下さい」
霖「ありがとう」
ｔ「いえいえ、デュエルなら得意中の得意ですから」
霖「では、この大会のルールを説明するね
１、まずデュエルのルールは普通の公式ルールて行うよ
２、大会の期間は３日間だよちなみにまだ１日目だから安心して。

3、その3日間で出来るだけ多くデュエルして、勝率が多い人が予選突破出来るんだよ。
以上それだけだよ」
t「分かりました」
霖「それと、その左腕に装着してるのはデュエルディスクで・・・・・」
t「あっ、それは分かってます」
霖「そうかい。ならいいや（説明が省けるし）」
t「では、3日間しかないし、そろそろ。」
霖「そうだね。最後に、この大会には人間妖怪妖精等種族を問わないから、注意してね。じゃあ、行ってらっしゃい」
t「行ってきます～?」
こうして俺のデュエル戦が始まった（笑）。

最強の妖精？（前書き）

え～と
ども＼（^―^）ｔｏｓｉｋｉ６です
今回はタイトル通り、最強の妖精（？）？が出ます（笑）

最強の妖精？

・・・・・・・

まさかこんな事になるとは誰も思ってもいなかったはずだろう。

現在いる場所が魔法の森なのだが・・・・・・・

道に迷ったー！

この先俺はどうすれば良いのだろうか・・・・・・

ｔ「・・・・・無理だ。この森から抜けだすのは」

完全に諦めかけたその時だった。一つの名案（？）が浮かんだ。

その名案とは、適当に進む！！

もう迷ってるから何の問題も無いだろう

という訳で適当に走って進み始めた。

少年移動中・・・・・

☆☆☆☆一時間後☆☆☆☆

完全に迷った（笑）

しかも走ったため、息切れ状態？

とりあえずその場に座り込み休憩する事にした。

その時だった。

どこから水の跳ねる音がした。

行く所も無いためそちらに自然と走って行った。

すると湖があった。

ｔ「よっしゃー。魔法の森から抜けだせた～」

チ「おっ？あんた誰なの？」

ｔ「俺の名はｔｏｓｉｋｉ６だけど何か？」

チ「ふ～ん。アタイはチルノ。幻想郷で最強の妖精よ」

ｔ「ぷっ（笑）」

思わず俺は笑ってしまったチ「なっ！、何よ。最強のアタイを馬鹿にしたわね。こうなったらこの遊戯王って奴であんたを叩きのめしてあげるわ」

t「いや、別に馬鹿にはして無いんだが。多分・・・・。まあいいか。そのデュエル受けてたつ！」

■■■■決闘開始■■■■

チ「まずはアタイのターンよ。ドロー」

チ「カードを二枚伏せて。マシュマロンを攻撃表示で召喚して、ターンエンドよ」

t「ぷっ（笑）」

チ「また笑ったわね。最強のアタイをここまで怒らせるなんて・・・・。手加減はしないわ。本気であんたを叩きのめすわ」

やべっ、かなり怒ってる

t「俺のターン。ドロー」

t「闇魔界の戦士ダークソードを召喚。闇魔界の戦士ダークソードでマシュマロンに攻撃！！」

チ「かかったわね」

t「！？」

チ「罠発動。聖なるバリアーミラーフォース！」

t「何！」

チ「この罠であんたのモンスターは破壊されるわ」

t「くっ・・・・・」

舐めてかかるとこのデュエル負けるな・・・・・？

t「カードを2枚伏せてターンエンド」

チ「アタイのターン。ドロー」

チ「マシュマロンを守備表示にして、モンスターをセットしてターンエンドよ」

t「俺のターン。ドロー」

t「手札より闇の誘惑を発動。デッキから2枚ドローして、手札のダーク・クリエイターを除外する。そして、ダーク・ヒーローゾンパイアを召喚して、裏側のモンスターに攻撃！」

チ「くっ・・・・アタイのレインボーフラワーが・・・」

t「これでターンエンド」

チ「アタイのターン。ドロー」
チ「罠発動、リビングデッドの呼び声！。さっき戦闘で破壊された、レインボーフラワーを特殊召喚して、2体を生け贄にして、アタイの最強の切り札、青氷の白夜龍（ブルーアイスホワイトナイツドラゴン）を召喚！」
t「馬鹿なっ・・・・・」
チ「青氷の白夜龍でダーク・ヒーローゾンパイアを攻撃」
t「くっ（ライフ４０００→２１００）ってライフが４０００だと！」
チ「あんた馬鹿なのこの大会ではライフは４０００なのよ」
霖之助エエ
t「俺のターンドロー」
t「モンスターをセットしてターンエンド」
チ「最強のアタイを前に成す術なしね。アタイのターンドロー」
チ「青氷の白夜龍で裏側モンスターに攻撃」
t「くっ・・・・ダークシー・フロートがっ・・・・・」
チ「ターンエンドよ」
ニヤリ（笑）
チ「何がおかしいの！？」
t「まさかこうもまんまと俺の罠にはまるとは・・・・」
チ「嘘っ・・・・」
t「嘘じゃないぜ。俺のターンドロー」
t「出でよダーク・アームドドラゴン！！」
チ「何このドラゴン・・・・。で、でも攻撃力なら青氷の白夜龍の方が上よ！」
t「ダーク・アームドドラゴンの効果発動」
チ「！？」
t「墓地の闇属性モンスター、ダークシー・フロートを除外して、青氷の白夜龍を破壊する」
チ「嘘・・・・・アタイの青氷の白夜龍が・・・・・」
t「ダーク・アームドドラゴンでダイレクトアタック！」

チ「ぐうっ・・・・・（ライフ４０００→１２００）でも、次のターンで逆転できるカードを引けば・・・・」
ｔ「まだだ、罠発動リビングデッドの呼び声！」
チ「え？」
ｔ「墓地の闇魔界の戦士ダークソードを召喚して、ダイレクトアタック！！これで終わりだああ」
チ「うわあああ（ライフ１２００→０）」
□□□□□□□□□□□□ｔ「よしっ！まずは一勝」
チ「負けた・・・・。最強のアタイが・・・・。でも良いデュエルだったわ。またやろううね？」
ｔ「ああ。またやろう」
チ「次こそはあんたを叩きのめすわ」
ｔ「叩きのめすって・・・・・？」
ＮＥＸＴステージへ・・・・・

悪運すぎる？（前書き）

どうもｔｏｓｉｋｉ６です
前の話で少しルールを変更しました。
ライフポイントを公式デュエルでは８０００ですが、アニメ遊戯王と同じ４０００にしました（笑）
それと、今回はデュエルはしません？
次回はいきなりデュエルから始まります

悪運すぎる？

よっしゃー
まずは一勝（笑）
チルノに勝ったぜ～
と心の中で叫びながら湖を後にしようとした時だった。
ふと斜め上を見れば・・・・・・
今までの自分の方向音痴での苦労が無駄だったと思った。ｏｒｚ
何故なら、斜め上に紅魔館があったからだ・・・・・
ｔ「・・・・・・。斜め上さえ見てから歩けばこんな苦労はなかったのだが・・・・・」
チ「あんた。本当にバカねぇ～」
と、チルノが後ろから呟いた
ｔ「はい・・・・バカです・・・・・？」
チ「アタイは天才だからね？」
チルノにバカにされた・・・・・・
一言で表すなら
オワタ＼（＾ｏ＾）／
まあ、それはそれとして、紅魔館を目指し走り初めた？
少年移動中・・・・・
ｔ「ゼェ、ゼェ」
とりあえず紅魔館に着いたが、息切れ中？
美「ＺＺＺ・・・・・？」
やはり紅魔館の門番、紅美鈴は寝てる
とまあ、紅魔館に侵入
ｔ「お邪魔します」
礼儀正しく言ったつもりだが、よく考えれば、ドアをノックでもすれば良かったと思った時だった。
いきなりナイフが何処からともなく、何本も飛んで来た。

t「ちょっ・・・・・。危なっ・・・・」
ギリギリ避けたつもりだったが右腕をナイフが多少かすった。
t「うっ・・・・」
咲「お嬢様は忙しいのでとっととお帰りになってもらいませんか？」
紅魔館のメイド十六夜咲夜が爽やかな笑顔でゆってきた。
逆にそれが怖かった
咲「早くお帰りになって下さい。でないと・・・・・・」
t「わっ、わかった」
と、言って俺は多少震えながら逃げた
そして紅魔館の門を出た時だった。
何者かがものすごい勢いで飛んできて、俺をぶっ飛ばした
t「グハっ・・・・」
文「あややや？」
ぶっ飛ばされた衝撃でゲ◯を吐きそうだった
t「オエッ。」
そのまま気を失ってしまった。
・・文「あや？気がつきましたか？」
t「ああ、なんとか」
とか言いながら右腕を見ると包帯が巻かれてた。
文「先ほどは、すいません。いきなりぶつかってしまって。」
t「いや別にもういいいだが・・・・それより、右腕に包帯を巻いてくれてありがとう。」
文「いやいや別に・・・。所であなたは一体？」
t「あ、俺はｔｏｓｉｋｉ６だ」
文「ほほう、変わった名前ですね。ニックネームですか？」
そりゃそうだろ誰が聞いたってこの名前はニックネームだろ（笑）
t「それより、ここって何処だ？さっきまでは紅魔館にいたはずじゃ・・・」

文「ここは妖怪の山の少し下にある滝ですよ」
ｔ「ふーん」
文「では私はそろそろこの辺りで・・・・」
ｔ「ああ」
と言って射命丸文は去っていった
ｔ「しっかし、何処かに決闘者がいないかな～」
に「私ならいるけど」
ｔ「うおっ・・・・びっくりした～」
後ろから声が聞こえたので振り返ったら河童の妖怪、河城にとりがいた
に「そんなに驚かなくても？」
ｔ「いや、びっくりした～」
に「所で、お前も決闘者なのか？」
ｔ「もちろん」
に「なら、人間とは昔からの仲だ、私とデュエルしよう」
ｔ「ＯＫ」
デュエル開始＆ａｍｐ；次回へ（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4936z/

東方遊紙符伝

2011年12月30日00時52分発行